

ノーリフティンダケア

— 五色・サルビアホールでの 取り組みを通して —

兵庫県社会福祉事業団

洲本市五色健康福祉総合センター



五色・サルビアホール

理学療法士 機能訓練指導員 竹渕直哉

1.背景

◇当法人の中期経営方針にノーリフティングケアの推進強化を計画

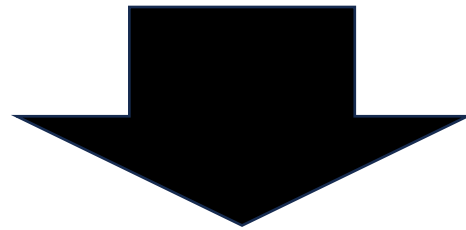
ノーリフティングケア：利用者様の身体を人の手で持ち上げたり、抱え上げたり、ベッド上で引きずって移動しない介助方法

	2019	2020	2021	2022	2023
重点研修	朝陽ヶ丘荘 たじま荘 丹寿荘	あわじ荘 五色・サルビアホール	障害者施設		
指導者配置		朝陽ヶ丘荘 たじま荘 丹寿荘	あわじ荘 五色・サルビアホール	障害者施設	
ノーリフティング宣言	●万寿の家 ●くにうみの里	●朝陽ヶ丘荘 ●たじま荘 ●丹寿荘	●あわじ荘 ●五色・サルビアホール	障害者施設	

2.目的

介護職従事後の腰痛発症として、その主たる原因は前屈位での介護動作であった。(峯松亮.2004)

福祉用具を導入するだけでなく、介護者に福祉用具を使用してもらえる組織的な取組が必要である。(岩切一幸.2017)



腰に負担のある動作を把握し体の使い方を修正することと、リフト等の福祉用具を活用してもらえるような組織的な取組を行うことで、腰痛割合の減少を図ることを目的とする

3.方法

◇取り組み内容と福祉用具導入の推移

	令和2年度	令和3年度	令和4年度
取り組み内容	研修：腰痛、体の使い方、福祉用具の使用方法、評価・選定 等		
		体制作り：評価、選定	評価者：PT > リーダー
	サブスクリプション(以下、サブスク) →一定期間の利用権として料金発生する方式		
	①腰に負担のある動作を測定 ②福祉用具のレンタル ③業者による研修		

福祉用具導入	令和2年度	令和3年度	令和4年度
	①購入 床上走行リフト(1台)	②サブスクでレンタル 床上走行リフト(全ユニット) 天井走行リフト(風呂場に設置)	③購入 サブスクで使用した用具

4.方法

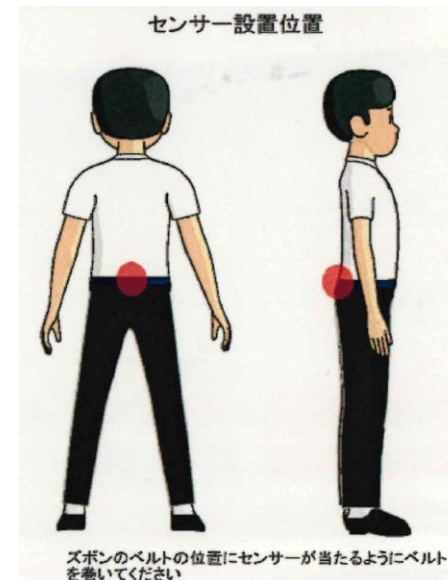
◇腰に負担のある動作を測定

対象者 : 五色・サルビアホールの介護職員
(パート以外の職員20名)

測定期間 : サブスク期間中の令和3年8月～令和5年1月
フロアリーダーのみ初回と最終の2回測定

測定機器 : Malpos Major(マルポスマジャー)

測定内容 : 体幹前傾と前傾中のひねりを測定



5.方法

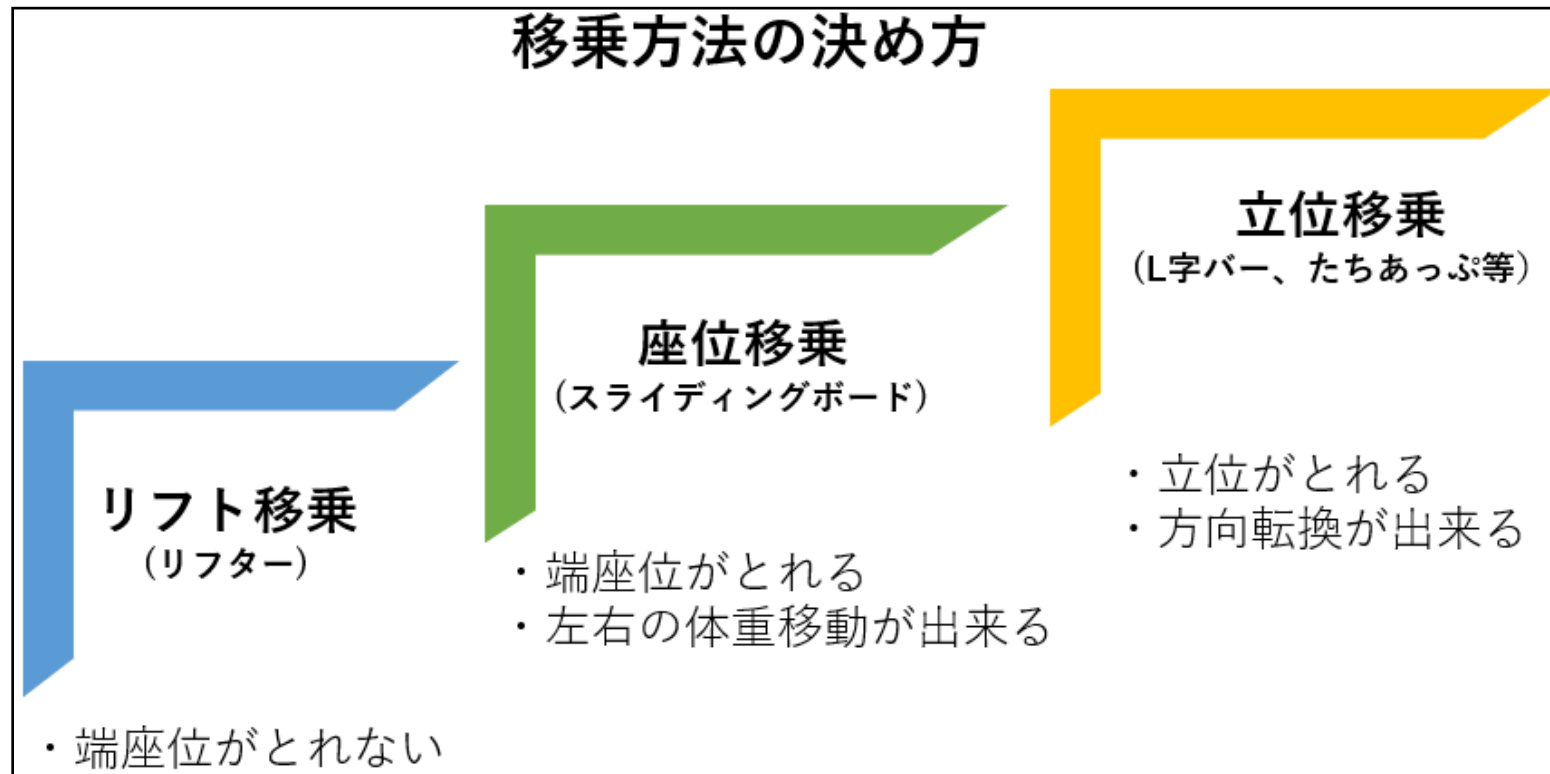
◇リフト対象者を評価・選定

対象者 : ユニット型特養入居者20名 従来型特養入居者60名

評価者 : PT (令和3年8月～令和4年4月)

各リーダー (令和4年4月～)

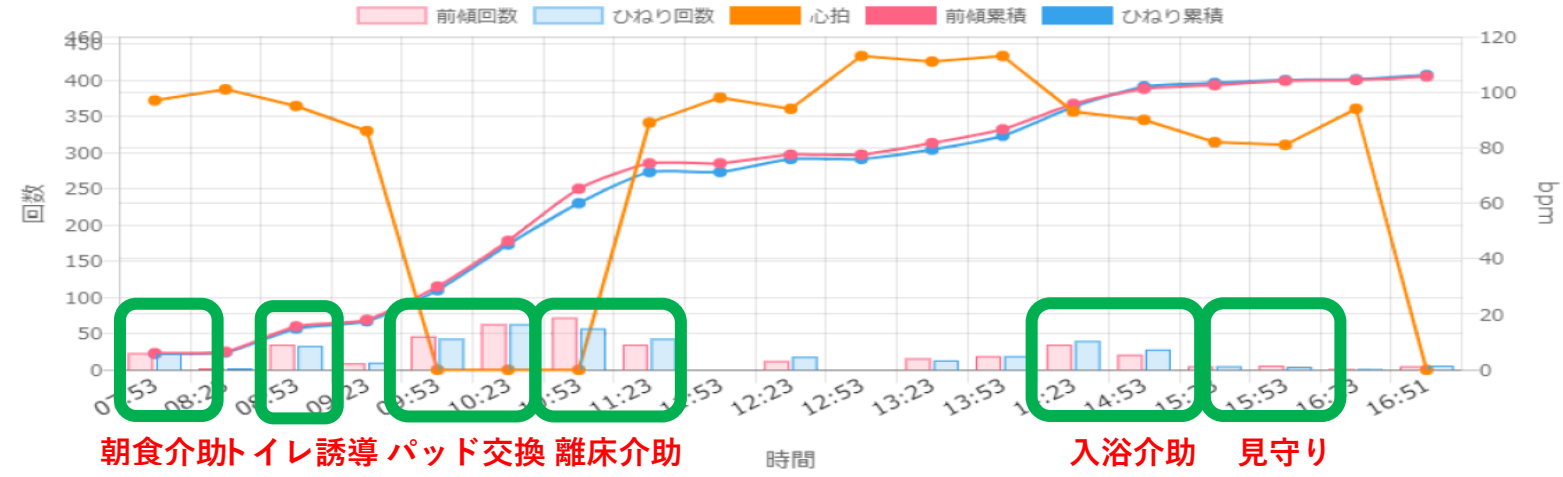
評価内容 : 移乗能力を評価しリフト移乗が必要な人を選定



6.結果

◇Malps Major測定結果(従来型特養フロアリーダー)

測定日：令和3年8月



介助者データ比較

腰痛リスク 72%

1回の前傾平均時間 00:13
前傾合計時間 01:28:44

1回のひねり平均時間 00:13
ひねり合計時間 01:28:56

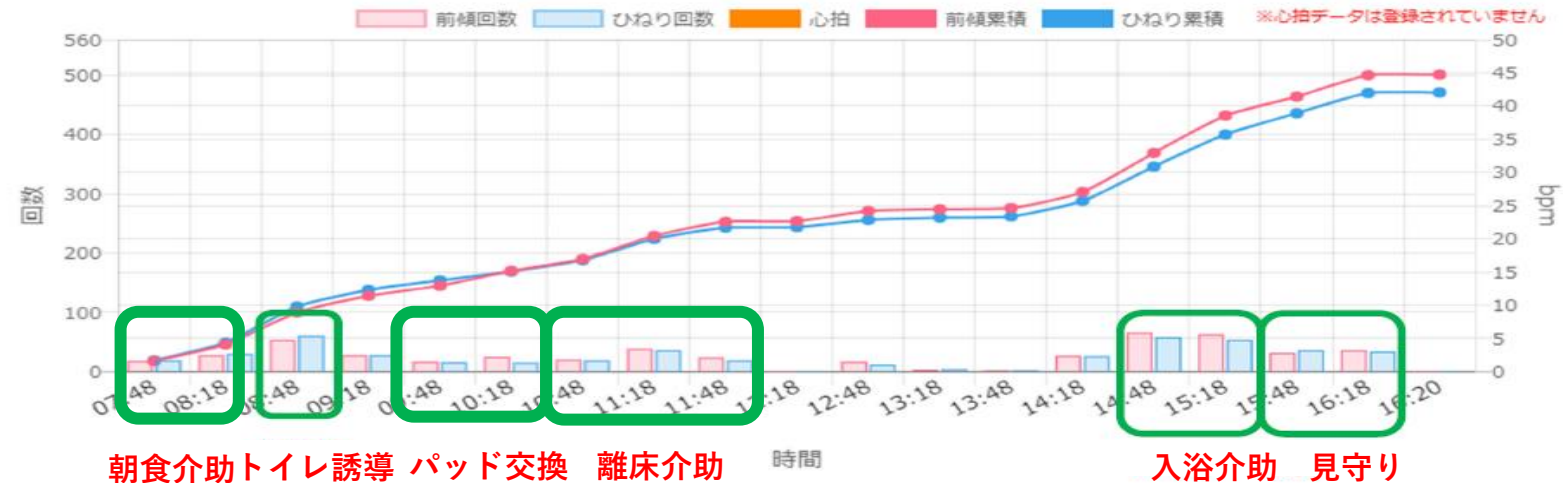
前傾回数 405回

前傾中のひねり回数 407回

開始時間 07:23:00 総合時間 09:28:18
終了時間 16:51:18



測定日：令和4年1月



介助者データ比較

腰痛リスク 42%

1回の前傾平均時間 00:04
前傾合計時間 00:36:28

1回のひねり平均時間 00:02
ひねり合計時間 00:23:30

前傾回数 501回

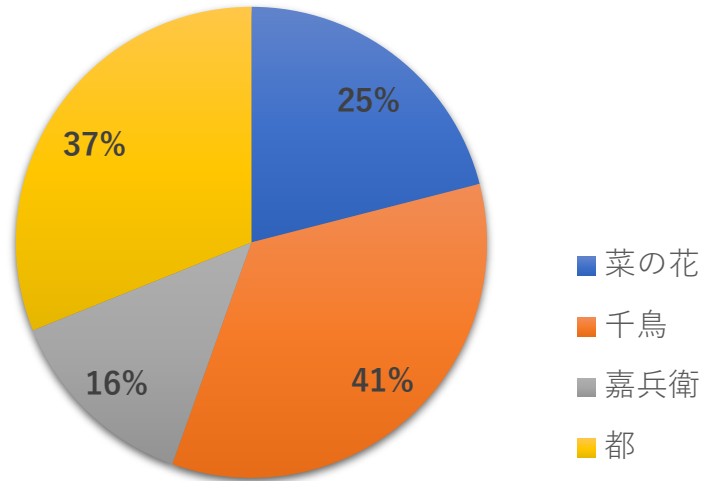
前傾中のひねり回数 471回

開始時間 07:18:32 総合時間 09:01:55
終了時間 16:20:27

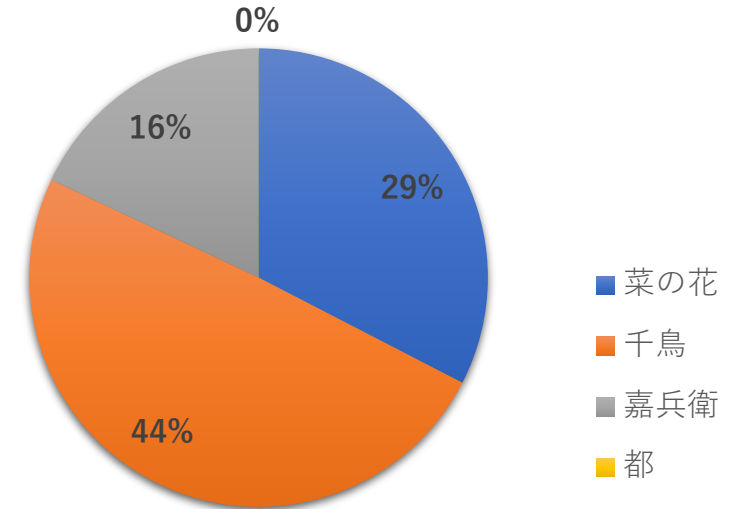
7.結果

◇リフト対象者割合とリフト使用割合

リフト対象者割合(令和3年8月時点)



リフト使用割合(令和3年8月時点)



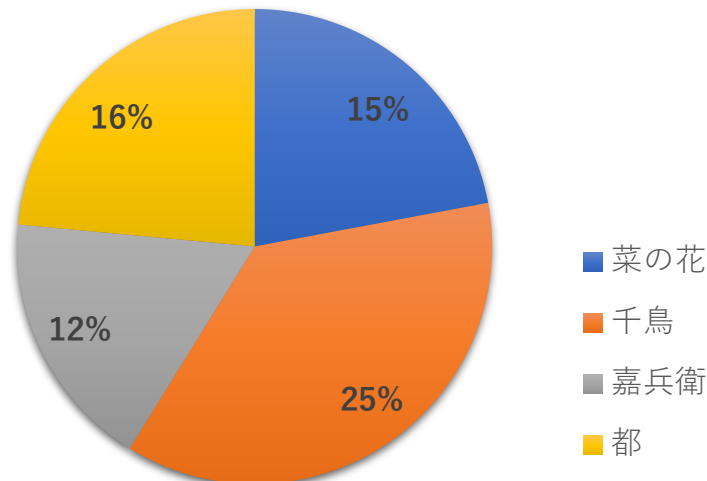
入居者数

菜の花	20名
千鳥	12名
嘉兵衛	24名
都	24名

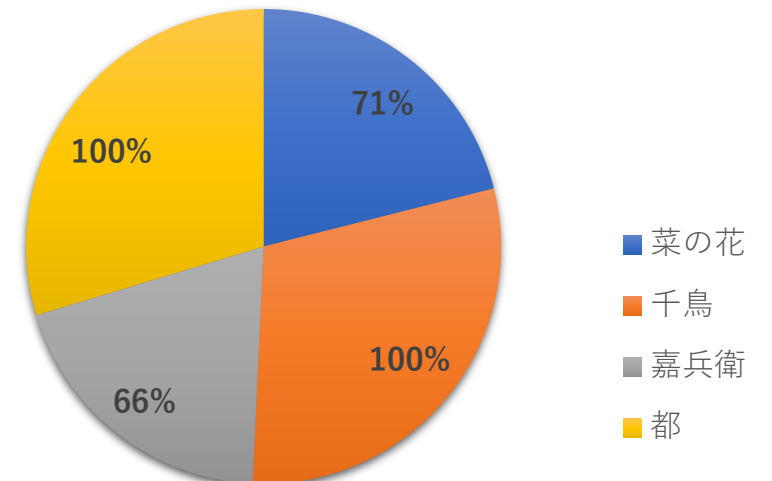
職員数 (パート以外)

菜の花	7名
千鳥	6名
嘉兵衛	6名
都	6名

リフト対象者割合(令和4年8月時点)



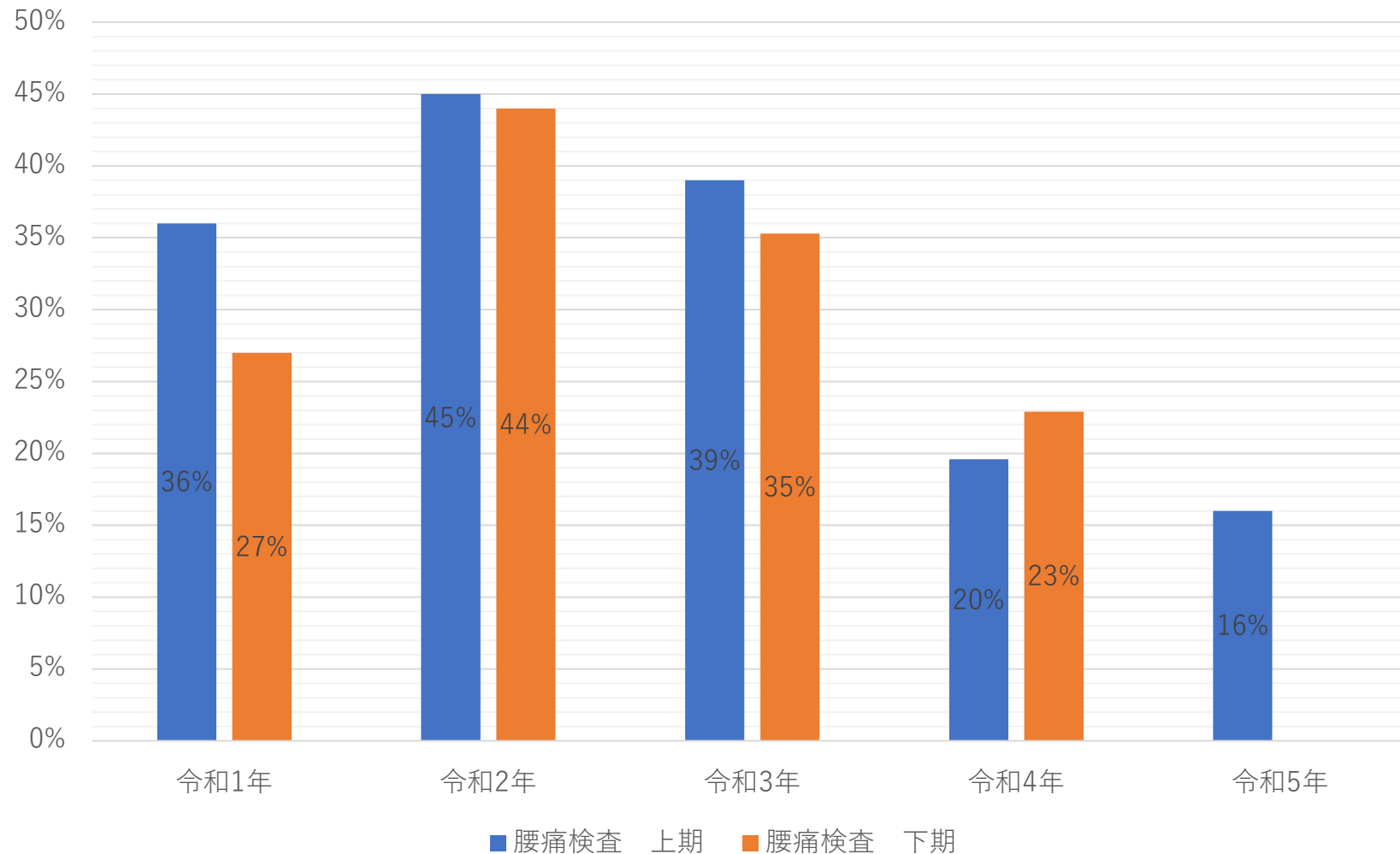
リフト使用割合(令和4年8月時点)



8.結果

◇腰痛割合

腰痛検査を受けた五色・サルビアホールの方のうち、腰痛の訴えがある人の割合



9. 考察

体の使い方の修正とリフト等の福祉用具を活用することは、前傾合計時間の短縮や腰痛割合が減少する傾向がある。

目指すべき介護の理念や実践が、各部署のリーダーや上司間で共有され、組織としてシステムを作り、強固にプラスの行動変容の状態と研修転移を進めることが肝要である。(川角.2020)



組織的な取組を続ける事により、介護職員がノーリフティングケアの有効性を実感でき、体の使い方の修正やリフトの活用といった行動変容が生まれ、腰痛割合の減少につながったと考えた。

10.結語

- ・今回の取組では、腰痛割合をゼロすることが出来なかった
- ・しかし、継続的な取組と取組内容によっては腰痛予防に一定の効果を認めた
- ・今後は、より効果的な腰痛予防対策のために、残存する腰痛の原因解明とそれに適した対応に取り組んでいきたい

11.利益相反（COI）の有無

- ・ポスター発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはありません